

一

次の問に答えなさい。

問1 次の二線は、どのことばに続きますか。それぞれ続くことばを記号で答えなさい。

① 崖がきに | ア | 一輪 | イ | ゆりの | ウ | 花が | エ | さいて | オ | いた。

② まさか | ア | かれは | イ | この期に | ウ | およんで | エ | 失敗は | オ | しまし。

③ 外国にいて | ウ | つくつくと | ア | 日本語の | イ | ありがたさを | エ | 知る | オ | ことが | オ | できた。

問2 次のことばの意味として最も適当なものを、それぞれ記号で答えなさい。

① かたずを飲む

ア のどが痛いのに無理に飲む。

イ のどがかわいていてがぶ飲みする。

ウ どうなるか心配で息をこらす。

エ おいしそうなものを見てつばを飲みこむ。

② なぞらえる

ア ほかのものとみてる。

イ ほかの人のせいにする。

ウ 一つずつ教えていく。

エ ふしぎなように見せる。

問3 次の□に入る漢字を一つずつ入れて、それぞれ意味が通るようにしなさい。

① □ がおけない

□ に入る

□ をもむ

□ が売れる

□ を出す

□ がきく

問4 次の□に漢字一字を入れて、対義語を完成させなさい。

① 退職 | □ | 職

③ 悲報 | □ | 報

② 満潮 | □ | 潮

④ 敵意 | □ | 意

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。なお、句読点は字数に数えます。

動物のなかで、笑うことができるのは人間だけです。馬も笑うという人もいますが、人間から見ても思うだけで、本当に笑っているかどうかはわかりません。A、笑うことをヒテイされるのは、人間をやめろというのと同じで、笑いをなくした生活がいかに不幸なものであるか、だれでも想像がつくでしょう。

もし、テレビもラジオもない山の中で、たった一人で暮らしていたら、けつして笑うこともなく、さみしくて頭がおかしくなってしまう。

笑い、というものは、人と人を結びつける心の栄養剤みたいなもので、仲のいい人との間であればあるほど、楽しい笑いが生まれます。というのも、笑いは一人だけで成立するのではなく、それを笑いあえる共通の理解力がなくてはならないからです。おもしろいことを言っても、相手がつてくれなくてはなりません。また、笑いは、時代や環境に左右されやすく、どんなにすぐれた笑いでも、時代や環境が変われば、その笑いの意味さえわからなくなってしまう。たとえば、テレビやマンガの本で有名になったギャグでも、何年かたてば、だれも笑わなくなってしまうでしょう。

にもかかわらず、昔話として語られてきた笑い話に、思わず吹きだしてしまうのはなぜでしょうか。それは、時代や環境を越えても笑いあえる人間性が、見事にとらえられているからです。あわて者に欲ばり、うぬぼれ

たとえば、嫁さんや婿さんをおろか者に仕立てたり、あるいは、知恵のたりない人間にばかなまねをさせるのも、そういう人物が実際にいたからでも、それをみんなでからかうためでもなく、自分たちのことを人ごとにするために、わざと作り上げた架空の人物というわけです。彼等が本当にからかう相手は仲間ではなく、権力を持ってはいばりちらしている人間です。\*とんち話の主人公が、わざと笑われ役になったり、そのとんちで見事に権力者をやっつけるのは、ザイサンも地位もない庶民にとって、この笑い話が、日頃のうつぶんをはらす唯一のDでもあったからです。なにしろ、武器を使わないゲンシ時代から、相手をやっつけるのに笑いが用いられたといえます。

「先ず第一に敵というものは笑うに足る人間であった。彼等が弱くして負けて通げる場合は勿論、時には案外手強くして、しかも結局は謀計を以つてこれを欺き得た場合、殊に彼等が驚き、又は困って屈服せざるを得なかつたという際などは、最も快く声を揃えて高笑いすることが出来た。或いは又味方の勇気をはげますべく、以前のそういう種類の印象を保存し、時にはやや誇張してこれを想像上に繰返し、入用の度毎に大いに笑ったこともあった。それが古くからの笑話の成立であつたと思う。」

これは、民俗学者の柳田国男の『笑いの文学のキゲン』というエッセイの一節です。だからこそ、庶民の間で生まれた笑い話にも、この考えが息づいていて、とりわけとんち名人の痛烈な風刺には、どんな権力者もい返す言葉がありません。

それにして私たちの祖先は、なんと楽しい笑い話を数多く残してくれ

④ 屋にのるま、こんな人間は、今だって私たちの身のまわりにたくさんいます。いや、私たち自身の心の中にも、同じような性格がひそんでいるはず。つまり、笑い話に登場する人物は、永久に変わらない人間のおろかさや弱さであり、それが私たち自身の姿と重なりあうからこそ、いつだつて笑うことができるのです。

笑い話の主人公は、ありえない体験やフシギな出来事の起きる場所より、私たちの住んでいるこの現実と同じ場所で行動しようとしています。『桃太郎』や『一寸法師』のような非凡な人間の一生を語るハッピーなお話でなく、愉快な人間のある時のおかしな出来事として語られます。その平凡で、おろかな行動が、私たちとそっくりであるところに、ユーモアと風刺が生まれます。B、長い間、口から耳への語りの中でみがきぬかれてきた笑いですから、だれにもわかりやすく、けつして色あせることがありません。

人をだまそうとしてだまされた話、なんにも知らないばかりに、とんでもない恥をかいてしまった話、おろかなことをして人に笑われる話、どれを読んでも、一般のお笑いばかりです。

C、私たちは、今でも親から人に笑われない人間になりなさい、といわれることがあります。だれだって、人に笑われるより笑う方にまわりたいと考えます。笑い話の主人公が、たいていは他人ごととして語られるのも、みんな笑う側にいたいからです。それに、よその人の話ということになれば、おたがいに傷つけることもなく、そのおろかぶりを一緒に批判したり、笑いとはしたりすることが出来ます。

たことか。日本人はユーモアに乏しいなんていわれますが、どうしてどうして、外国人に負けにくいぐらいの豊かなユーモア精神を持っています。私たちもそのユーモア精神を学んで、より人間らしく生きたいものです。

(西本鶏介『続・日本のわらい話』の解説より)

(注)

- \*風刺……世の中や人の悪いところを、それとなく批判したり、からかうりすること。
- \*とんち……その場その場で思いつく、うまい知恵や考え。
- \*笑うに足る……笑うに値する。
- \*謀計……相手をだますための計画。
- \*欺く……うそをついて人をだます。
- \*誇張……実際より大きさにあらわすこと。
- \*入用……必要なこと。
- \*エッセイ……考えたことや感じたことを自由な形式で書いた文章。随筆。

問1 〳〵線 a e のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 **A** 〳〵 **C** に入る最も適当なことを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア ところで イ ですから ウ それとも エ しかし  
オ しかも

問3 **D** に入る二字熟語を文中から探して、ぬき出しなさい。

問4 〳〵線①「心の栄養剤みたい」と同じ表現技法を使っているものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 長い雨も上がり、ようやく雲の間から太陽がほほえみ始めた。  
イ 公園のように緑のあるところを増やそう。  
ウ この美しい光景を心のカメラに焼き付ける。  
エ 汗が滝のように流れ落ちる。

問5 〳〵線②「何年かたてば、だれも笑わなくなってしまおう」とありますが、笑わなくなってしまおう理由として、何が不足していると筆者は言っていますか。文中からぬき出しなさい。

問6 〳〵線③「時代や環境を越えても笑いあえる人間性」と同じ内容を表す部分を文中から二十字以内でぬき出しなさい。

問7 〳〵線④「こんな人間」が指す内容と反対の意味にあたることを文中からぬき出しなさい。

問8 〳〵線⑤「私たちの住んでいるこの現実と同じ場所で行動しよう」とありますが、なぜ現実と同じ場所で行動しようとするのですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

い。

- ア 未知の世界より現実の方が笑い話になるから。  
イ 現実以外の場所ではおろかな話にならないから。  
ウ 時代や環境を越えると意味がわからないから。  
エ 現実と同じ場所の方が主人公に共感できるから。

問9 〳〵線⑥「自分たちのことを人ごとにする」とありますが、なぜ人ごとにするのですか。文中から十字以内でぬき出しなさい。

問10 〳〵線⑦「とりわけとんち」言葉がありません」とありますが、なぜその風刺には言い返せないのですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア もともと権力者というのは大昔からばかにされる存在だから。  
イ その時の権力者が笑うのに十分あたいる人物であったから。  
ウ 自分たちが笑われる側にならないように仕組まれているから。  
エ とんち名人が上手に、また大げさに話を作り上げているから。

問11 〳〵線⑧「私たちもそのユーモア精神を学んで、より人間らしく生きたいものです」とありますが、なぜ筆者はそう考えているのですか。その理由となる一文を文中から探し、最初の五字で答えなさい。

と、がんばれといいかけて、よしたんじゃないかな、と思った。

お母さんには、がんばれといいたくない **□** がある。

〳〵線⑨「七月のなかごろ、とつぜんお父さんが入院した。入院したと思ったら、あつけなく死んでしまった。お葬式があり、お母さんのつとめさき **A** きまり、始とお母さんはふたりでこの町にこしてきた。

そのお父さんが、死ぬまえに始にいったことが、がんばれ、だった。ベッドによこになった、別人のようなお父さんががんばれといわれ、そうしないとわるいような気がして、始はうなずいた。ふりかえると、 **②** いた表情のお母さんと目があつた。

お葬式がおわつた日の夕食のあと、お母さんが始にたずねた。

「ねえ。お父さん、あなたにがんばれっていったわね。あなたは、どういう気持ちでうなずいたの？」

なんとこたえればよいかわからず、だまっていた。

「お父さんのこと、あなたはどう思う？」

「どう思うって？」

「そんなことではひとには勝てん、お父さんの口ぐせだったわ。でも、ひとに負けないように仕事をするって、そんなにいいことだったのかしら。それであのひと、満足だったのかしら。いそがしい、いそがしい、そういいながら、あのひとと走りつづけたんだわ。ひとよりまえを、もつとはやく、もつとはやくって。走りつづけて、走りつづけて、ばたつてたおれた。そんな気がするわ。」

お母さんは、両手にはさんだ湯のみをにらみつけているように見えた。

〳〵

転入生の始は、四年一組の教室で、今までだれも見なかったものを見ました。次の文章を読んで、後の問に答えなさい。なお、句読点・記号は字数に数えます。

転入の手続きをおえて、ろうかにでたお母さんは、始の目をのぞきこんだ。

「もちろん、ひとりでかえられるわね。」

始はうなずいた。

「じゃ……」

お母さんはうなずきかえしてから、先生に頭をさげた。

「それでは、これで失礼しますが、よろしくおねがいます。」

きょうから始の **〳〵** タンニンになる市田先生も、おじぎした。

「こちらこそ、よろしくおねがいます。」

銀行のひとみだ、と始は思った。九月になって一週間。まだあついに背広にネクタイ。そしてきつちりとわけた頭。それに黒ぶちのめがねが、 **①** そんな感じだった。

お母さんは、正面玄関のところで、もういちど頭をさげて、日ざしのなかへでていった。セミの鳴き声がかこえる。

かばんをもつた始の肩を、市田先生がぼんとたたいた。

「いこうか。四年一組の教室は二階だ。最初は、なれないだろうが、ま、がんばれ。」

先生についてあるきながら始は、さつきお母さんも、じゃ、といったあ

「たしかにお父さんは、お父さんのやり方でがんばったんだと思う。でも、お母さんの気持ちをもっとくわ。もしもがんばるって言うことが、お父さんみたいに生きるって言うことだったら、……ひとに勝つことが、がんばるって言うことだったら、始、お母さんはあなたに、がんばってほしくないかなかないのよ。」

お葬式のあいだなかなかお母さんの目から、なみだがおちた。

見てはいけないものを見たような気がして、始は目をおとした。

③ だれもない砂漠を、いっしょうけんめいに、ひとり走っているお父さんのすがたがうかんだ。お父さんは、走って、走って、とつぜんつんのめってたおれた。

うまれてはじめて、お父さんのことを、かわいそうだと思った――。

なじみのないろうか階段があるき、始は、先生のあとについて、四年一組の教室にはいった。知らない顔がこちらを見ている。どの顔も、みょうにのつべりした顔に見えた。

木下 始くん

先生が黒板に名まえを書いて、紹介した。うながされて、ひとことあいさつするために、一歩まえにでる。

「ぼくは……」

そこでもうしなつた。とんでもないものが見えたのだ。

目のまえ、一メートルほどのところに、だしぬけにすぎとおった男があらわれた。二十センチくらいの大きさの男は、くたびれた背広とよれよれ

始は、うしろのはしつこの席まであるく自分の足が、床についていないよくな気がした。

席についたとたん、すぎとおった男のすがたが、また見えた。

教室のまえに、黒板をあかるくするけいこう灯が二本、天井からぶらさがっている。その右がわのけいこう灯のはしに、男は腰かけていた。よそを見るふりをしながら、よこ目で、始のほうをうかがっている。

ムネがどきどきしはじめた。ほかのだれもその男のほうを見ていない。

見えないらしい。なぜ自分には見えるのか。なにか病気で、まぼろしを見ているのだろうか。病氣――？

病氣から死ということばがうかんだ。どきつとした。そいつが死神ではないかと思った。そういえば、あのくたびれた陰気なようす。きつとそうだ。お父さんの死と、この男は、なにか関係があるのにながいない。

始は、まっすぐにそいつを見あげると、心のなかではなしかけた。

④ おまえは、死神だろ。

信じられないことがおこった。むすつとした顔で、ほかのところを見るふりをしていた男は、びくつとびあがり、バランスをくずして、けいこう灯からおちそうになった。あやうくたいせいをたてなおすと、始のほうにむきなおし、あわてて口をばくばくさせ、片手を目のまえでふった。そしてすうつと見えなくなつてしまった。

始は、そいつのきえたあたりの、うしろの壁を、ほうつと見つめつづけた。心のなかの音がとどいた、としか考えられなかった。

三度めにそいつのすがたが見えたのは、そのあと、先生が算数のテスト

のネクタイで、背なかには小さなつばさがあった。空中を、ゆつくりとはばたいてよこぎつていく。

ただよこぎつたのではない。始と目があった。おもながで、あぶらつけないばさばさ髪、気のよわそうな顔つきの男は、始とあわせたままの目をしばたかせながら、五十センチくらいをはたはたととんで、きゆうにぎくつとした。そのとたん、ふつときえてしまった。

すぎとおつてはいたが、はつきり見えた。マドガラスごしに外を見てみると、自分の顔がガラスにうつり、外の景色とかさなって見えることがある。そんなふうに見えた。

いまのはなんだ。

そう思ったとき、みんなのわらい声で、われにかえた。顔がまっかになるのを感じた。もうことばはつづかなかつた。

先生の声がきこえた。

「ま、あいさつはいいだろう。席をきめよう。」

まだわらいをくすぶらせながら、みんなはいっせいにふりむいた。そこには、ひとつだけあいた机があった。いちばんうしろ、いちばんろうかがわの席だった。

「そんなところじゃないの。」

だれかの小声につづいて、まんなかあたりにすわっていた男の子がさけんだ。

「みゆき、カンゲキ！」

くすぶっていたわらい声が、はじけた。なにかおかしいのかわからない。

をみんなにかえしたときだった。

市田先生は、点数をいいながらテストをかえす。始は男のことが気になつて、うわのそらできいていた。だが、おしまいに近くなると、どうやら10点満点のテストを、得点の高かったものから順にかえしているらしいことに、気がついた。

「森みゆき、1点。」

よばれて立ちあがったのは、始のとなりにすわっている女の子だった。

「坂井征二、0点。」

うけとりにいったのは、みゆきのむこうの子で、それでおしまひだった。

先生にテストをかえしてもらったしゅんかん、征二の頭の上でかげろうがゆるめいた。と思うと、すぎとおった男だった。席にもどる征二につきまとうように、ふわふわととんでいる。とびながら、ちらちらと始のほうを氣にした。征二が席についても、そばをはなれず、机の上に立つてテストを見ている。

征二の手がテストをくしゃつとまるめた。手は、男をすりぬけたように見えた。

ふいに、始と征二のあいだにすわっていたみゆきが、始の顔を見た。自分が見られていたと思つたらしい。みゆきは始を見て、れたように、にとわらつた。始は、あわてて目をそらせた。

算数の授業がはじまった。三けたの数を二けたの数でわる計算だった。教科書はまえの学校のおなじで、もうならつたところだ。市田先生の口

ぐせらしい「な、わかるだろ」と、めがねのおくのほそい目が、始には、なじめなかった。教室のみんなのすがたも、きょうはじめて見るせいか、映画の場面でも見ているような気がする。

それよりも、すきとおった男のことが気になった。そつと征二のほうを見ようとすると、そのたびに教科書のはしっこにマンガをかいているみゆきが、こちらを見る。しかたなく、始は目をそらせる。おかげで、男のすがたがいつきえたのか、わからなかった。

算数の時間のおしまいに、先生はわり算の問題が十問インサツされた紙をくばった。

⑤「さあ、きょうやったところのテストだ。みんな、がんばれ。」

がんばれといわれたとたん、始の手がとまった。もともと、すきとおった男のことで頭がいっぱいで、本気でテストにとりくむ気分ではない。テストにがんばるといふのは、ひとに勝つことかな。ふと、そんなことが頭にうかんだ。

どのくらい、ぼんやりしていたのだろうか。

「あと、一分。」

先生の声で、まだ名まえさえ書きおわっていないことに気づいた。きゅうに、テストをしなければならぬと思った。

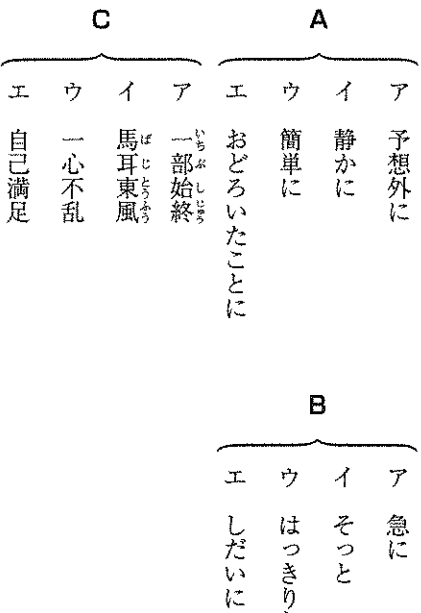
いそいで名まえを書き、二問かたづけたところで、目のまえをかげろうがよこぎった。はっと目でおうと、すきとおった男が、みゆきのテストの上におり立つところだった。

——きみはいつたい、なんなんだ。

問1 線a eのカタカナを漢字に直しなさい。

問2 線A「あつげなく」・B「だしぬけに」・C「うわのそらで」の

文中での意味として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。



問3 にはあてはまることをばを漢字二字で答えなさい。

問4 線①「そんな感じ」とはどんな感じですか。文中のことは使つ

て答えなさい。

問5 線②「かたい表情」にこめられている気持ちとして適当でない

ものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 不満    イ 不快    ウ 困惑    エ 激怒

問6 線③「だれもない砂漠を、いっしょうけんめいに、ひとり

走っている」とは、お父さんのどのような生き方をたとえていますか。

「生き方」に続く形で、文中から十五字でぬき出しなさい。

問7 線④「おまえは、死神だろ」に表れている気持ちとして最も適

当なものを次から選び、記号で答えなさい。

心のなかでといかけた。男は、めいわくそうな顔で、ちらりと始を見た。「よし、やめ。」

先生の声と同時にチャイムが鳴りだし、男のすがたもきえた。

休み時間になると、みゆきがしたしげに、はなしかけてきた。

「この学校のことでき、わからないことがあったら、なんでもきいてよね。」

始はおもいきってたずねてみた。

「あのう、この教室に、すきとおった小さな男がいる？」

みゆきは、さがりぎみの目をまるくして始を見た。そしてまわりを見まわしてから、小声でいった。

「そんなこと、ほかのひとにいわないほうがいいわよ。へんな子だつて思われるから。」

(岡田淳『びりつかすの神さま』より)

ア 自分が病気である原因はこの死神のせいであるにちがいない、という気持ち。

イ 自分が見ているのは、まほろしなのか、死神なのか、ついにはつきりしたぞ、という気持ち。

ウ 「まっすくにそいつを見あげる」という態度からもわかる、死神に対する怒りの気持ち。

エ 父の死との関係性が「この男」にあることを強く確信している気持ち。

問8 線⑤「がんばれといわれたとたん、始の手がとまった」とあり

ますが、なぜとまったのですか。その理由となる一文を文中から探し、最初の五字で答えなさい。

問9 本文の内容として適当でないものを次から二つ選び、記号で答えな

さい。

ア 父の葬式の日の母のようすを、始はまともに見ることができなかった。

イ みゆきは、始の言葉を聞いて、おどろきの気持ちをかくせなかった。

ウ テストの結果から、成績順に座席が決められていることに始は気がついた。

エ 自分の心の声が、死神だと思っている男に届いたのではないかと始は感じた。

オ 自分にしか見えない男が父の死と関わっている、と始は考えた。

